

Colin Starnes : *Augustine's Conversion:
A Guide to the Argument of Confessions I-IX*

Wilfrid Laurier University Press, Waterloo (Ontario),
1990, pp.xv+303.

James J. O'Donnell : *Augustine, Confessions, 3 vols.*

Clarendon Press, Oxford, 1992, pp.lxxiii+205, pp. xiii+484, pp. xiii+481.

中 川 純 男

近年アウグスティヌスの『告白』に関する書物が相次いで出版されている。その中で特に注目されるのは、Starnes による第一巻から第九巻までの、O'Donnell による全巻の注解書であろう。注解の内容においては大きく異なるこの二書はしかし、共通の方針の下に執筆されている。それは「アウグスティヌスをアウグスティヌスから理解する (O'Donnell p.lxii, Starnes p.xii)」という方針である。『告白』の史実的信憑性が疑われて以来『告白』をアウグスティヌスの生の記録として読むことが怠られてきたという反省、あるいは Courcelle 以後のアウグスティヌス研究が、新プラトン主義とアウグスティヌスとの比較をもっぱら表現を手がかりとして論じてきたという反省から導き出された方針である。第七巻の注解において、アウグスティヌスが読んだ「プラトン派の書物」が何であったかを知ることはアウグスティヌスの議論を理解するためには必要ではない (p.182)、と断言する Starnes において、さまざまな研究あるいは校訂版テキストにおいて増加の一途にあった関連箇所、並行箇所の指摘は完全に無視されている。『告白』を『告白』から理解するという態度において Starnes は徹底している。O'Donnell もまた従来の研究が見失ったアウグスティヌスの生全体への視点を回復しようとする意図においては Starnes と共通するが、その態度はむしろアウグスティヌスの中で『告白』を理解することに力点を置くものである。他の著作家との比較はアウグスティヌスが直接影響を受けたケケロ、アンブロシウスを除いて最小限にとどめられているが、アウグスティヌスの著作の中に見出される関連箇所は積極的に利用されている。

Starnes の書はその全体が『告白』を読むための注である。テキストおよび翻訳は

取められていない。本文は各巻を内容からいくつかのパラグラフに分けて分析、解説するという体裁をとっており、文献学的、研究史的注は各巻末尾にまとめられている。『告白』は事実の記述とその理由あるいは普遍的根拠の説明とが縦糸と横糸のように織りなされた書物であり、歴史性と論理性とのこのような統一こそ個と普通の統一というキリスト教のテーマのオウグスティヌス的理解である (p. xii) と考える Starnes は、『告白』の中に歴史的記述の部分とその論理的説明の部分とを区別し、いかなる史実が、どのような論理で説明されているかを明らかにすることを本書の目的としている。このような立場から『告白』を見るとときしかし、『告白』の全巻がオウグスティヌスの歴史を記した書物ではないということを認めなければならないであろう。Starnes は『告白』を第九巻までと第十巻、第十一巻以降の三つの部分に分け、本書の内容は最初の部分に限定する。この三分割の独自の根拠はすでに Starnes 自身が別の論文で主張してきたことであるが、次の通りである。『告白』が神と人間とに向かって語られていることはオウグスティヌス自身述べていることであるが、第一巻から第九巻までは特に父なる神とすべての人に向かって語られ、第十巻は子なる神とキリスト教徒に向かって、第十一巻から第十三巻までは聖霊とキリスト教の哲学者に向かって語られている。このことが『告白』のそれぞれの部分の記述に特徴を与えている。最初の部分においては、すべての人に共通の人間本性と神の創造、神の法が主題となっている。Starnes は『告白』の構成のいたるところに三一的構造を認める。たとえば第一巻から第九巻まででは、第一巻から第七巻までが外なる世界を通しての創造者たる神との関係を、第八巻はキリストとの内的関係を、第九巻は聖霊との関係をそれぞれ中心におく三一的構成をとっていると考える (p. 1)。しかしこれが『告白』全体の三一的構成とどのように関係するのかについては説明していない。また、このように『告白』の構成にあえて整合性を認めようとするのが、全く問題を生じていないわけではない。なぜなら、第一巻の冒頭五章までは『告白』全体の序であるという理由で取り扱われていないが、第五章と第六章との間に何らかの非連続性を認めることは困難だからである。『告白』を『告白』から理解することを標榜しつつも、『告白』の構成に整合性を認める Starnes は、第九巻までの記述にも一貫性を求める。その一貫性のモチーフとして、現代の読者に理解されることも念頭に置きつつ導入する (Starnes の立場から言えば、読みとる) のは、自然 nature および理性 reason という概念である。この二つの概念が解釈の過程で担わされる役割はいささか複雑で

ある。幼児期、自らの身体的本性 (bodily nature) は無邪気であったが、理性的能力 (rational powers, animus) に由来する非本性的の欲望において全体的自然の秩序を覆そうとしていた (p.6)。第一巻において、自らの記憶しない幼児期をアウグスティヌスが語るの、アウグスティヌスの意図が自分の nature を述べることにあったためであると説明される。続いて、ことばの習得過程が注目されるのも、ことばによって理性が自然的秩序に含まれない普遍を理解することができるようになるからである (p.9)。また第二巻に語られる青年期は動物的本性 (animal nature) と理性的本性 (rational nature) がともに成熟を迎える時期である (p.33)。自らの自然的欲望によって全体的自然の秩序を覆し、自らの理性によって全体的理性の秩序を覆そうとしたのが青年期である。第四巻に記される、マニ教に疑問を抱きつつも、ただちに離れることができなかつた時期とは、キリストにおいて (可知的普遍的) 理性が (感覚的物的) 自然において実現していることを知らず、この世にあって普遍的なものを愛することが不可能に思われた時期に他ならない (p.100)。このような理性と自然との区別が第七巻、第八巻の評価を念頭に置いたものであることは言うまでもない。アウグスティヌスは次第に神についての正しい知識を獲得してゆく。しかしそれは「もし神が存在するなら、神は非物的でなければならない」といった条件文の形で表現されるような知識であった。神の存在を教え、神についての知識に内実を与えたのが、プラトン派の書物を契機とする「神を見る」という経験である (p.184)。ここにアウグスティヌスの理性は全体的理性と接合することになる。第八巻に述べられた回心は理性的意志が非理性的意志 (習慣的 nature, 動物性 nature) を克服することとされている (p.233-236)。このような視点から見ると、第九巻の必要であった理由が問われるであろう。Starnes によれば、回心は人生の終わりではない、新たな生の始まりである。アウグスティヌスは、自分自身とモニカの回心以後の生を記すことによって回心の記録を完成させている (p.247)。このように見てくると、Starnes は回心を二つの段階に分けて考え、それぞれを reason と nature というキーワードで特徴づけることによって、第一巻からの一貫したモチーフとしていることが知られるであろう。しかしわれわれはこの一貫性が、reason および nature という語の多義性に支えられていることにも気づかざるを得ない。真に『告白』の統一性を主張するためには、そのような多義性の根拠が明らかにされなければならない。アウグスティヌスにとって自己を語るとは自己の生に固有の出来事のみを語ることではない、人間の本性

に共通のこともまた自己の生であるという Starnes の指摘は後述する Chadwick とも共通のすぐれた着眼点である (p.26 n.19, cf Chadwick p.xxiv). 『告白』冒頭で「人間は死の性を纏いつつも、あなたを讚美しようとする」と告白するアウグスティヌスが「人間の本性」について告白しようとしていることは確かである。しかし「本性」を語ることと回心を語ることは同じではないであろう。

『告白』の統一性に関して、O'Donnell の立場は対照的である。一つの鍵によって『告白』の統一性を明らかにすることには明確に否定的な態度をとっているからである。『告白』はその凝縮された内容から見て短期間の内に完成されたのではないか (p.xli), と推測する O'Donnell にとって、このことが『告白』の作品としての未熟さを意味しないことはもちろんである。アウグスティヌスはわれわれに統一性を開示する鍵を探すよう求めているのではない、われわれの魂を励まそうとしているのだ、と言われている (p. xxiii). Starnes が『告白』の記述の史実的信憑性をとりあえずは認めた上で、「回心」の構造を分析しようとしているのに対し、O'Donnell はテキストの限界を示すことによりアウグスティヌスの回心を疑う理由の不当であることを論ずる。従来解釈はテキストの理解に偏ってきた。しかし、アウグスティヌスにとって回心は教義を信じることではなく、cult, liturgy としての信仰を受け入れることであつた。われわれは古代末期に cult が果たしていた役割について不十分な知識しか持っていないが、アウグスティヌスのキリスト教が 100% 教義であつたとは信じがたい。テキストは生ではない。このことを念頭において『告白』を理解すべきである (p.xxvii-xxx), とされる。それ自体ことばでない生をことばにするにあたって、類例を見ない「告白」という形を生み出したことが、アウグスティヌスの著作活動において革新的な役割を果たしているとの指摘も重要である (p. xlii-xlvii). 三冊からなる本書の第一巻には序とラテン語テキスト、第二、第三巻には注が収められている。テキストは Skutella (1969改訂版) をほぼ踏襲しており、criticus apparatus はないが、punctuation は改められている。校訂上の問題は重要なものに限り注で論じられている。注はテキストに即したいわゆる running commentary の形式を踏襲するもので、その量は膨大である。『告白』全体にわたるこのような注解書としては Gibb & Montgomery (1908) 以来の本格的な力作と言えよう。Gibb & Montgomery 以後のアウグスティヌス研究の飛躍的な成果がテキスト解釈に役立つ範囲で周到に取り入れられている。ただし、Courcelle, P. *Recherches sur les Confessions de saint*

Augustin (1950) 以後盛んとなったある種の傾向、すなわち表現の類似を求めて先行文献を渉猟することは意図的に避けられる。このことは新プラトン主義の影響が無視されているということではない。むしろ「プラトン派の書物とは何か」とか「新プラトン主義かキリスト教か」という問題に現時点において可能な一定の結論がえられたという認識、その成果を踏まえてアウグスティヌスに即した『告白』の内在的理解を深めることがむしろ現在の課題であるという認識に基づいていると思われる。注のかなりの部分は当該テキストの理解を助けると思われるアウグスティヌスの著作の中の関連箇所の指摘と分析に当てられている。『告白』あるいは『詩編講解』などからの関連箇所の指摘は、コンピュータを利用したと思われ、網羅的である。このことはしかし単純な検索の結果が羅列してあるということではない。どのような観点から関連箇所を指摘するかには隠れた洞察が感じられる。また多数の関連箇所がある場合、その中で特に現在のテキストの理解に有益と思われる箇所が慎重に選ばれ、テキストの引用とともに解説を加えられている。各巻の注解の最初におかれた要約もその巻の構成を一目でわかるよう工夫されており有益である。著者自身の哲学的立場といったものが注の内容として語られることはないが、内容の選択と全体の構成はすぐれた見識を明らかにしている。

以上の二書と相前後として『告白』全巻の英訳が出版された。 *Saint Augustine, Confessions, Translated with an Introduction and Notes by Henry Chadwick, Oxford Univ. Pr. (1991)* である。訳文そのものについての評価は慎まなければならないが、訳出上の工夫については Watts (1631) に負うところが多々多いように思われる。古代末期の思想的状況、新プラトン主義との思想的共通性を重視する Chadwick は、前二書と異なり、脚注において古典期の著作やプロティノスの関連箇所を多く指摘している。付せられた序文は、『告白』成立の状況、また内容理解のために必要と考えられるアウグスティヌスの経歴についての説明に当てられているが、重要と思われるのは、新プラトン主義とくにプロティノスとの思想的関係についての指摘である。『告白』の最初でアウグスティヌスは神について語ることの困難を述べている。継起する音声によってしか語るができず、決して同時に意味の全体を現前させることのできないこの世でのあり方において、正しく意味を伝えることに困難を見る点でアウグスティヌスはプロティノスと共通する。この問題に対する答えをアウグスティヌスは聖書と教会に見出した。聖書は人間のことばで書かれているが、信

じるものにとっては神の存在を告げるしとなるからである、と言われる。『告白』の統一性について、Chadwick は神から離れて迷う魂が苦難の後、回心によって神へと帰るといふ第九巻までの筋書きは、被造物全体にとっての筋書きでもあり、新プラトン主義と新約聖書とに共通するテーマであると言う。『告白』の統一性を上昇のテーマのみに見ることに対しては O'Donnell の批判的な評価もあるが、「上昇」を単に精神の上昇としてではなく、被造物全体の神に休らうまでの上昇として理解するなら、それが『告白』の指し示す一つの方向であることは確かであろう。なお、本邦においても宮谷宣史氏による美しい翻訳の上巻が出版されたことを記しておかなければならない。

Vernon J. Bourke:

Augustine's Love of Wisdom; An Introspective Philosophy,
Purdue University Press, West Lafayette, Indiana, 1992, pp. vii+234.

荻野弘之

アウグスティヌス『告白録』全巻のうちで、第10巻が自伝的部分(1-9)と聖書解釈の部分(11-13)を橋渡しする特異な位置を占め、しかも彼の哲学的思索のある典型を示している事実は今更言うまでもない。本書はこの第10巻の前半(1.1~30.42)をラテン語原文と英訳の見開きに収め、その前後に概説と註釈を加えた形で提供したものである。つまり『告白録』の個別的主题に関する最先端の研究書ではないが、従来の研究成果を吸収して要領よくまとめ、他の著作との関連にも適宜言及して、基本テキストを提供すると同時に、中規模な註釈書の役割をも果している。従って(以下に論評するような幾つかの欠陥にもかかわらず)初学者がアウグスティヌスの原文に直接ふれる手引として恰好の入門書であると共に、CommentsやNotesを通じて専門研究者にとっても本文解釈の上で有益な知見を得られる簡便な書物であると思われる。評者は本書をいずれ原典講読の演習の教本として教室で実際に用いてみたいと考えているが、同時に(思想概説書、翻訳、特殊研究のいずれとも異なる)こうした種類の書物が、わが国の翻訳業績や個別研究の進展をふまえて、日本語で出版される日